三省堂新書3

生き急ぐ

スターリン獄の日本人

内村剛介

SSD
三省堂

三省堂新書 3

生き急ぐ

スターリン獄の日本人

内村剛介

三省堂

内　村　剛　介

評論家。1920年栃木県の生まれ。同地の小学校を卒業後，満州へ渡り，大連の中学を経て哈爾賓（ハルビン）学院卒業。関東軍に徴用，1945年から56年までソ連に抑留された。
著書　「呪縛の構造」（現代思潮社）
訳書　トロッキー「文学と革命」（現代思潮社）ロリニカイテ「マーシャの日記」（雪書房）
現住所　東京都東村山市

生き急ぐ——スターリン獄の日本人——

三省堂新書 3

定価　250円

昭和42年9月20日　初版発行

著者©　内村剛介

発行者　株式会社　三省堂

発行所　株式会社　三省堂
東京都千代田区神田神保町1の1
電話　東京（293）3441（大代表）
振替口座　東京　54300

<新書3生き急ぐ>

はじめに

ある日本人が日本にいて日本について一九五六年一月二十七日という日付けのある文章を書いた。

「われわれは他の者を『理解』し得るものではないし、かつまた『理解』しないでもさしつかえないのではないだろうか。理解したと思ったり、又は理解しないではいけないと思ったりするのは、われわれの性格の強さのためではなくて、その弱さのためではないのか。犬がニワトリを見ているように見ていればよい。それ以上のなにができよう？　いや、反対に、それこそ重要な（理解）ではないだろうか？　ホントウのヒューマニズムはそこからはじまる。そこ以外のところからはじめようとするから、いろいろゴタゴタが起きるのではないのか？」（三好十郎『病中手記』）

かれは一九五八年に死んだ。余命いくばくもない病床でこのように書いたときかれは日本のヒューマニズムに殺人鬼の顔を見ていた。絶筆『神という殺人者』はそれを証している。これはもはや反語ではない。かれはいらだってますます激しく、愛する日本を責めているのである。

一九五六年。長くロシヤにいたもうひとりの日本人がロシヤから帰って来る。敗戦直後平壌で捕えられたとき、かれは二十五歳であった。北鮮の〝革命〟劇を「犬がニワトリを見るように見て」いたのではない、なにぶんかれは若かったのだし……　それからのち十一年の在ソ。一九五三年にスターリンが〝昇天〟した。だがその、若い一日本人はスターリンがみずからその手でこしらえた獄になお三年ほど滞留し、スターリンの亡霊と対話しつづける。一九五六年、ポーランドの民衆、ハンガリーの民衆が蜂起する。スターリンの亡霊は多忙をきわめ、ついにかれを日本へ返す。

在ソ中その一日本人は「弱さのために」ソビエト社会の最低部の一角に探照燈を敷いて「他の者を理解しよう」としつづけていた。かすかな光ではある。だが、それが矮小なりといえどもほかならぬかれ自身の体軀から発するものであることは疑うべくもない。最低の地点から照し出すのであるから、その光はやがてソビエトを透過して全宇宙を捉えうるのではないか。

かれがロシヤに見たのは「ヒューマンなもの」であった。それはもはやヒューマニズムといったものではないが、かといって、殺人鬼の顔などではさらにない。かれは殺人鬼を見たくなかった、だからそうなったのだ、ともいえよう。かれが弱かったからでもあろう。だが、この弱さにもかかわらず、かれの精神の領域へは、――このサーチライトの発光源へは、――ついに何人も踏み込むことを許されなかったのだ。

かれはこれからもやはりわれわれ浅ましい人間たちの讃歌をうたいつづけるだろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

もくじ

はじめに

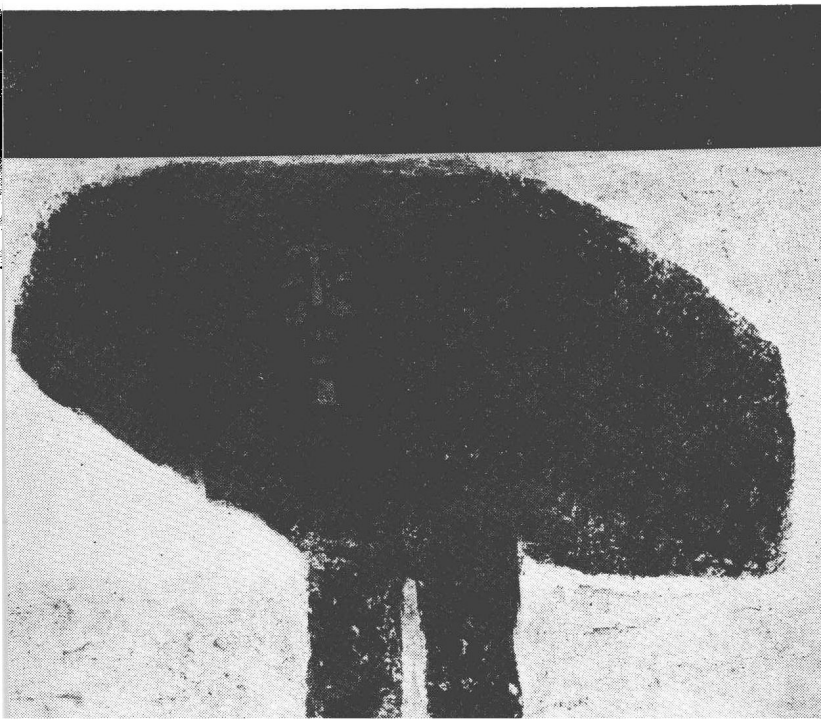
審問……1
——歴史はわれわれの行く手に、前方にあるんだ。——

抑圧……101
——時間が停っているのか。——

破綻……159
——正義は負ける。——

あとがき「作者の情況メモ」

審問



運ぶ人 ▶

香月泰男

1960 油彩

頭だけが生きている
重たすぎる頭である
どこへ行こうとするのか？　どこへ？
佇立する……
ひとはうしろが光っているという
ひとは前がもっと光っているぞともいう
頭をもてあましてたたずむ
顔と目だけが生きている　口は固い ■

生き急ぎ　また　感じせく

――ヴァゼムスキー公――

獄吏はロマンがお好き
誰よりも文学が入用ときてる

――マンデリシタム――

「あなたは逮捕されました」――ひどく事務的にそう言われた。

逮捕されたとはどういうことなのか。捕虜ラーゲリでの抑留、抑留者の禁足――それはまだ逮捕ではなかったわけか。捕虜だって禁足されている。いつも監視され、強いられていることにかわり

はない。ところがそれはまだ「逮捕」ではなかった……

「あなたは逮捕されました」――こういう場合には、「お前は」ではなくて、「あなたは」と言わねばならぬらしい。

「あなたは逮捕されました」――かれはたしかにそう言った。逮捕の事実がこのことば以後厳として客観的に存在し、それはわたしもあなたももはやどうすることもできるものではないということらしい。つまり逮捕ということばを境にして世界はまっ二つに裂けてしまったというわけだ。

ではなぜ逮捕状を執行しない？　それほど厳粛なたったひとつの時間であるというなら、まず逮捕するぞと宣言した書きものを見せつけ、その時間を不動のものにし、歴史の上にくっきりきわだたせておくべきではないか。

これからさき、逮捕以降、わたしはどのようにふるまえばいいのか。いまのところわたしにはこの厳粛な区切りは少しもはっきりしていない。まだ手錠をかけられたわけでもなし、数分まえと事情は少しもかわっていない。おそらくこの時間の区切りはかれらにとって儀式なのである。儀式であるからには当然芝居がかったところがあっていい。

芝居がかったところだって？　何を言っている！　運命の岐れ道にさしかかっているというときに！　いやちがう。どこか遠いところできまじめな劇が演じられていることはたしかだ。そしてそれにこのわたしも加わっているようだ。だがそれはやはり本当のわたしではない。本当のわたしは今ここでこうして厳粛な笑いを、おかしさをこらえている。それはまじめなはなし、そうなのだ。

どうしようもなくそうなのだ。

それから二か月近くひとり監禁されているうちに秋はすっかり深くなった。今はコルホーズ（集団農場）の畑も丸裸である。人っ子ひとりいない。今わたしを両側から押えつけるようにして兵隊が二人同乗している。トラックが走る。もうすぐコルホーズの倉庫だ。無蓋のトラックの上はひどく寒い。風はない。だがトラックが走ると、その車体を包むようにして風が起り巻きついてくる。空は曇っている。空が低くなっている。来年の五月まではいつもこんなふうだろう。太陽はどこか。曇天の上へかくれてしまった。

車はコルホーズの倉庫の前を砂ぼこりをあげて走り過ぎる。ここで、この倉庫の前で、この夏、年寄りが、日本人ばかりと見て、ぐちったのを覚えている。「印度の洪水だ、パキスタンの地震だといっちゃあ持ち出して気前よくふるまうが、わしらこのくにの国民のめしはどうしてくれる！わしらだって食わにゃあならんのに。よその国民のほうがかわいいっていうわけか？　捕虜の君らのほうがまだましだ。だいいちよその国だ。苦労したってやっぱり気が楽じゃあねえかよ。」

コルホーズには年寄りと女しかいない。その女衆といっしょにあの畑でキャベツのとりいれをやっているときにこのトラックがわたしを迎えに来たのだった。また例の取り調べか、しつこいな、と思って乗った。トラックはこんどはラーゲリの構内へ入らず鉄条網に沿って走り空家のバラックの前におだやかに停まった。それから二カ月近くたっているだろう。その間じゅうひとりで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

バラックに監禁されたままだった。

錆びたレールを日に数度たたくのがラーゲリの構内からわたしのバラックまできこえて来たものだ。朝食の合図、作業準備の合図、夕食の合図——錆びたレールの鐘がラーゲリの日課を区切って鳴った。その合図がきこえるとお腹がひきしまってうなり出す。やがて兵隊が飯盒に入れた食事を運んできては「生きてるか？」ときく。空家のバラックには目つぶしの板が打ちつけてあるのでそのなかはまっくらだ。食事がすむと監禁されている部屋から外へ出された。日に二度の用便というわけ。兵隊の見ている前で尻を出すのははじめひどく具合が悪く、出るはずのものが出て来なくて弱った。バラックの床のあちこちに野ぐそがしてあるが、それはたいがいわたしの戦跡ともいうべきもの。兵隊よ、足もとに気をつけろ！

やはりきょうはようすがかわっている。どこへ行くのか？——

「兵隊！　どこへ連れて行く？」

「行ってみればわかる。はなしは厳禁。お前、もう逮捕されちゃったんだろ。」

「……」

日本人ラーゲリの監視兵である。　かれは少年兵だ。　監禁前にはいっしょにコルホーズの畑へも行った。監禁後はわたしのバラックへ食事を運んで来た。あるとき、ま夜中に、かれが突然わたし

の部屋をそうぞうしくノックしたことがある——

「眠ってるか？　おい、聞いているか？」

誰にも言うな、と何度も念を押しておいてから、かれは、父親がラーゲリにいること、それも生きているか死んでいるかわからぬこと、新兵になってシベリヤへ来て入営早々土方と大工をやらされたことなどを話した。

「兵営？　そんなものぼくらにはなかったんだ。野っ原へいきなりつれて行かれて、斧とのこぎりをあてがわれた。これで兵舎を建てて住め、というわけさ。釘か？　釘なんてあるもんか！　針金を切って釘を作るのさ。煉瓦？　そいつもみんなで焼いたよ。完全なコムミューンというやつさ。自給自足で行かにゃならんのだ。なにしろ戦争じゃないか。〝すべてを前線へ〟だ。すべてを、だ。まったく文字通りすべてを前線へ、さ。」

兵隊はたばこに火をつけると言った。

「ソーロク、うん、ソーロクをお前にやるよ。」

つまり一本のたばこを二人でのむのだが、その際かれがさきに六〇パーセント分喫い、残り四〇（ソーロク）パーセントをわたしにくれるというわけだ。

たばこをわたしに渡すことはもちろん禁じられている。わたしとは話をしてもいけないことになっている。ところでかれは兵隊食までご馳走してくれる。そのご馳走ぶりがまたふるっている。まず自分が口をつけスープの上澄みだけを吸う。そして具をいっぱい残したままわたしの方へつき

出すのだ。次にスプーンをなめまわし、さておごそかにこう言う——「さあ、食べな！　スプーンもこのとおりきれいにしたからな！」

トラックは町へ入って来た。これは人の町というよりは倉庫街とでもいうべきものだろう。広告がまったくないのだ。このくにでは広告なぞはするに及ばぬということなのだろうが、それがないせいか、家々がみなまるで倉庫のように見える。しかもどの家のつくりも似たりよったりであって、いわば表情をもたぬ。

トラックはいつもの取調所の前でとまった。少年兵はわかれぎわに、

「ブッチ・ズダロフ！」

元気でな！　と言った。ブッチ・ズダロフ！　とわたしも返した。

「ルーキ・ナザート！」

手を後ろへ！　手を後ろにまわして組め！——取調所の兵隊の号令だ。

逮捕とはつまりこういうことであったのか。

廊下を行く。

「ストーイ！　ク・スチェンケ！」

ほかの囚人を連行してくるところなのだろう。これはわたしに見せてはならぬものなのだ。とま

れ！　壁の方を向け！　もはやラーゲリではないのだ。逮捕されたのだ。囚人になったのだ。空が見えなくなっただけではない。人を見てもいけないのだ。

「よし、行け！」

また進む。

「ストーイ！　ク・スチェンケ！　お前、今日がはじめてのお嫁入りというわけか?!　手はどうした?・手を背中に組むんだ！　よし、前へ！」

新婚初日ではあるまいし、痛いとか、知らぬとか、わからぬとか言わせないというのだ。新婚初日！　言いようにこと欠かぬとはこのことだ。

取調官の少佐がじっとわたしの顔をみつめている。「坐れ」とも言わなかった。手で、坐れと合図しただけだ。

少佐はさっきから頑固に黙りとおしている。

わたしにまず口火を切らせようというのだ。

かれはまだ黙っている。とうのむかしに見すかしているぞと言わぬばかりのおもちだ。

＜だるまさん、だるまさん、にらめっこしましょ。笑うと負けよ！＞――わたしのどこかで、遠く遠く、にらめっこしましょが聞こえている。このたいへんきまじめな瞬間に何かがわたしに笑いかけている。奇妙だ。

＜……逮捕されたのだ。　逮捕されたということは、　しかしまだ判決を受けたということではない。だのに少佐の眼は、すでに永久に運命の定まった罪人を見ているのだ、といったようすではないか。＞　黙ってかれはまだわたしを見ている。　ぴくりとも動かない。　わたしもじっとしている。＜目を伏せてはいけない。目を伏せるなと言っているんだ。目を伏せるな！　じっと相手を見ていろ！＞だが、　そのわたしを見ているはずの相手の眼は、　すこしも光らない。　つやのないまなざしだ。その目をのぞき込むわたしの視線は相手のガラス玉の温度を持たぬ眼球の表面をつるりとすべって空しくはねかえされてくる。

ものの十分もたったろうか。かれがふいに口をきった。

「タドコロさん。興奮しなさんな。興奮することはありませんよ。」

それだけを一気に言うとかれは急に活気づいてきた。

「タドコロさん！　あなたは普通の敵じゃあない。普通の、そんじょそこらにころがっている日本人捕虜とはちがう。タドコロさん！　あんたは普通の敵じゃない。いうなればあんたは誠実な、思想を持った敵なんだ。さらにいうなら、あなたは高潔な敵でさえあるのだ。そうなんだ！　あなたは誠実な人間で教養があり、あんたの思想に確信を持っている。われわれはあんたを敵ながら立派だと思う。尊敬さえしている。思想に忠実であるということは、こりゃあ立派なことなんだ。

タドコロさん！　あなたは隠している。隠して日本へ持ち帰ろうとしている。何を、なぜ隠して

いるのか――それはむろんあなたの良心の問題だ。あなたは今それを隠しおおせると信じている。

ところで、あなたはそれを持ち帰って、誰に渡すつもりですか？　日本は敗けたんですよ。日本はいまアメリカ軍に占領されているのです。日本の主人公は今ではもうアメリカだ。あなたは持ち帰ってそれをアメリカ人に渡すつもりかどうか。いや、そうはいかんのだ。持ち帰るにはまずわれわれの関門を通らなければならない。誰が誰を、だ。つまり、誰が誰をペレヒトリチするかということだ。問題は誰が誰をここで瞞着するかということなのだ。

タドコロさん！　そうでしょ？　そうではないか！」

「……」

「タドコロさん！　しかしわたしは誠実にあなたに警告すべきだと思う。敵が降伏しなければ、そいつの息き根っ子を止めるだけさ、とほかならぬゴーリキイが言っている。タドコロさん！」

「……」

「わたしは知っています。むろん知っています。タドコロさん！　敗けたからといってすぐに手を挙げるということはあなたには出来ないのだということを。それはそうです。タドコロさん！だからこそわたしたちはあなたは誠実な立派な人だと言っているのです。だからこそわたしたちはラーゲリに、普通の捕虜ラーゲリに住んでいるあなたに敬意を払ってここ二年間遠くから観察して来たのです。

タドコロさん！　しかし、時間は急ぎ、走り過ぎて行きます。これまた何とも致しかねるカテゴ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb